連載／インタビュー

売上げ26%の伸び／αシクロデキストリン、メタボ分野で期待

シクロケム　代表取締役社長　寺尾 啓二 氏

会社概要
ドイツワッカーケミー社のシクロデキストリンとその関連製品、スペシャリティー・ファインケミカル製品を取り扱う日本総代理店として02年7月に設立。
☎03・5614・7147

――昨年を振り返ると。

寺尾 シクロケムとしての売り上げは26%アップしました。8億が約10億になった形です。グループ全体では15億に達しました。その要因として一つはCoQ10の包接体が三菱ガス化学と、共同でマーケティングを開始し、成果の一つとして大手のCoQ10包接体商品が上市された点が大きいと思います。

また難消化性デキストリンのαシクロデキストリン（以後、αCD）がメタボリックとアレルギー関係で、数々の有効性を示す研究成果が明らかになっているなかで少しずつ注目されてきています。

αCDはコメやパンなどのでんぷんが体内で分解されるのを抑える効果が確認されていましたが、最近の研究で砂糖の甘みはそのままに体内への吸収を抑制する作用が明らかになりました。

砂糖の1割の分量を配合することで効果が確認されています。競合品と比較すると約3倍量加える必要がありますが、αCDの値段がキロ1000円なので、値段的には抑えることができます。

このほか、CDに関しては5月にオーストリーのウィーンで国際シクロデキストリンシンポジウムがあるのですが、そこで4件の研究成果を発表する予定です。

その一つにORACの測定方法に関する日本食品分析センターとの共同発表があります。抗酸化能を評価するORACという指標はアメリカが中心となり広がっていますが、日本側からの提案で、メチル化シクロデキストリンを加えることで「水溶性物質も脂溶性物質も同時にORACの評価ができる」という発表です。これまでは水溶性、不溶性はそれぞれ別個に評価することが基本でした。

――マヌカハニーの最近の状況は。

寺尾 売り上げは前年比6倍で順調に伸びています。ただ全体の市場はまだ大きいとは言えず、今後さらなる市場拡大を目指します。機能性として体の中の悪影響を及ぼすような、例えば歯周病原菌や、胃のピロリ菌、その先の腸におけるO157、カンピロバクターなどの除菌効果やインフルエンザなどの抗ウィルス作用について有効なデータが出てきています。

また口臭抑制でもかなり期待できるものだと思います。消臭作用については、昨年日本臨床栄養学会で発表したものが評価を受け、論文化の依頼が学会側から来ており、現在取り組んでいます。

――今年の展開は。

寺尾 現在本を執筆中ですが、美容分野でローヤルゼリー製品を作ります。ローヤルゼリー中に含まれる10・ヒドロキシデセン酸という脂肪酸はコラーゲン産生に関わっていますが、CD包接で安定化したローヤルゼリーとビタミンCを配合するとその効果は更に増すということが分かっており、これを元に製品化します。今年前半には発売できると思います。

同様にもう一つ今年前半にニュージーランド・マヌカヘルス社の供給するプロポリスを国内に向けて上市します。プロポリスはビジネスも一つの目的ではありますが、それよりも神経線維腫症（NF）患者に対して、早く提供したいという気持ちがあります。NFという病気は3000～5000人に1人がかかる病気で、稀な病気の為にこれを治療するための医薬品は無いのが現状です。しかし悩んでいる人は沢山います。

そうした中でNF CURE Japanの丸田先生が、マヌカヘルス社のプロポリス（Bio30）にPAK遮断によるNF腫瘍の増殖を抑える効果を見出し、現在海外では治験も実施中です。

マヌカヘルス社と独占販売契約を結ぶ私どもは、プロポリスにCD包接加工を施し、体内に吸収されにくく不安定な有用成分の吸収性と安定性を高めた製品を開発し、国内でもBio30が使用できる環境を整えます。これが私どもの今年一番のやるべきことだろうと思っています。

――注目の素材は。

寺尾 アスタキサンチンですね。アスタキサンチンは高いフリーラジカル消去能を持つ物質です。しかし、不安定で光に当たり続けると成分が消滅してしまいます。これをCD包接化により遮光しなくても安定化させることに成功しています。さらにビタミンEを加えることで極端に抗酸化能が上がるデータもあります。

――業界への提案は。

寺尾 天然素材とうたった製品は多いですが、自然から取り出して集めたものというのは既に自然の状態ではないので安定性にかけるものが多くあります。製品化して1、2年たった後、その物質は保たれているのか。配合したときに壊れるかどうか、光や熱に弱いものかという点を健食メーカーは念頭に入れ製品作りを行うべきでしょう。

不安定な物質を安定にする技術も私どもは持っています。吸収性が高まる〝1が2になる技術〟は一般受けしますが、安定性を保つ〝マイナス1を0にする技術〟も重要で、業界に向けて提案を続けていきます。